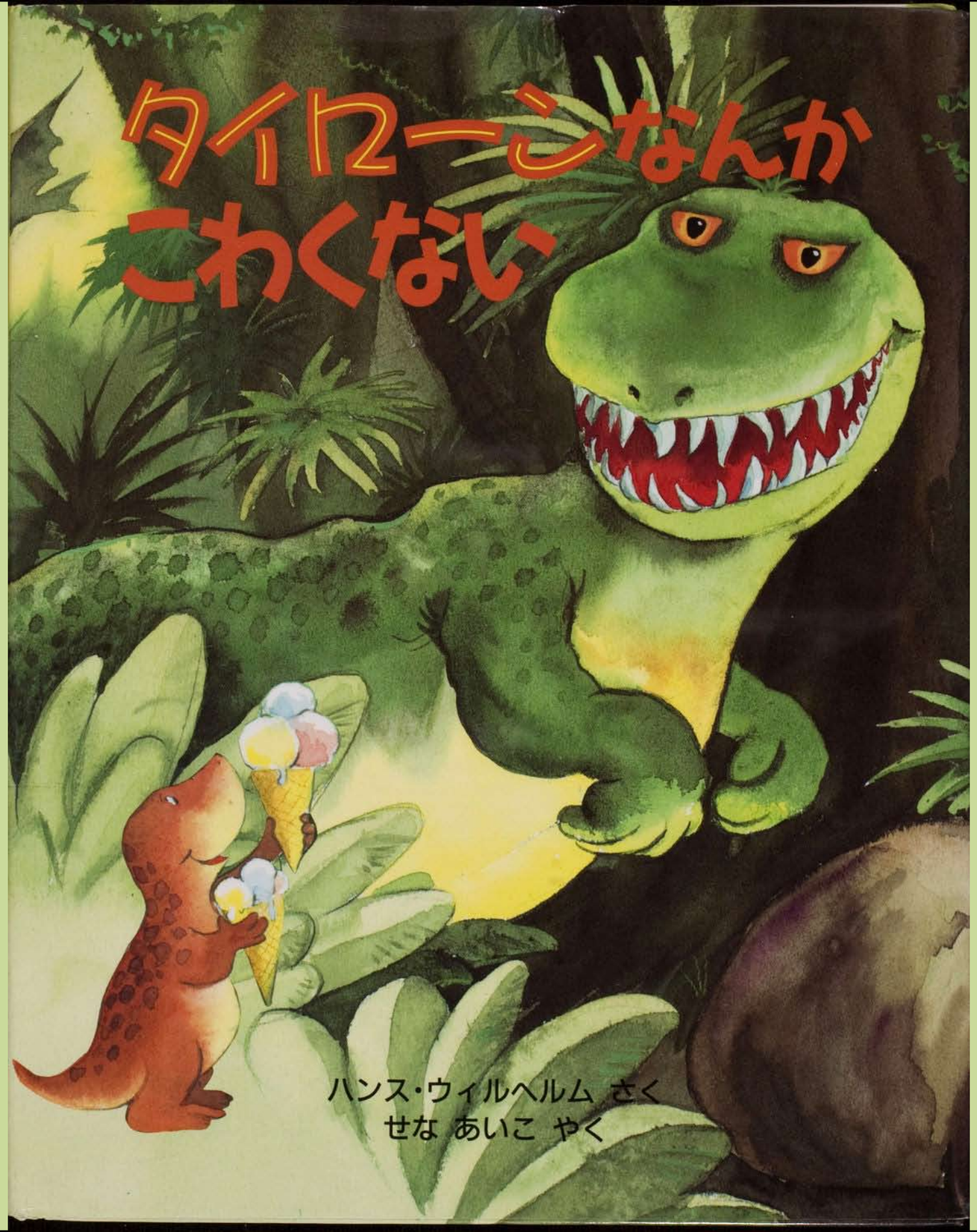


Copyright: Hans Wilhelm, Inc.

タイラーシ なんか こわくない

ハンス・ウィルヘルム さく
せな あいこ やく

評 論 社

タイローンなんか
こわくない

ボーランドは、チビきょうりゅう。
パパと ママと 3びきそろって、
ぬまちの もりに すんでいた。

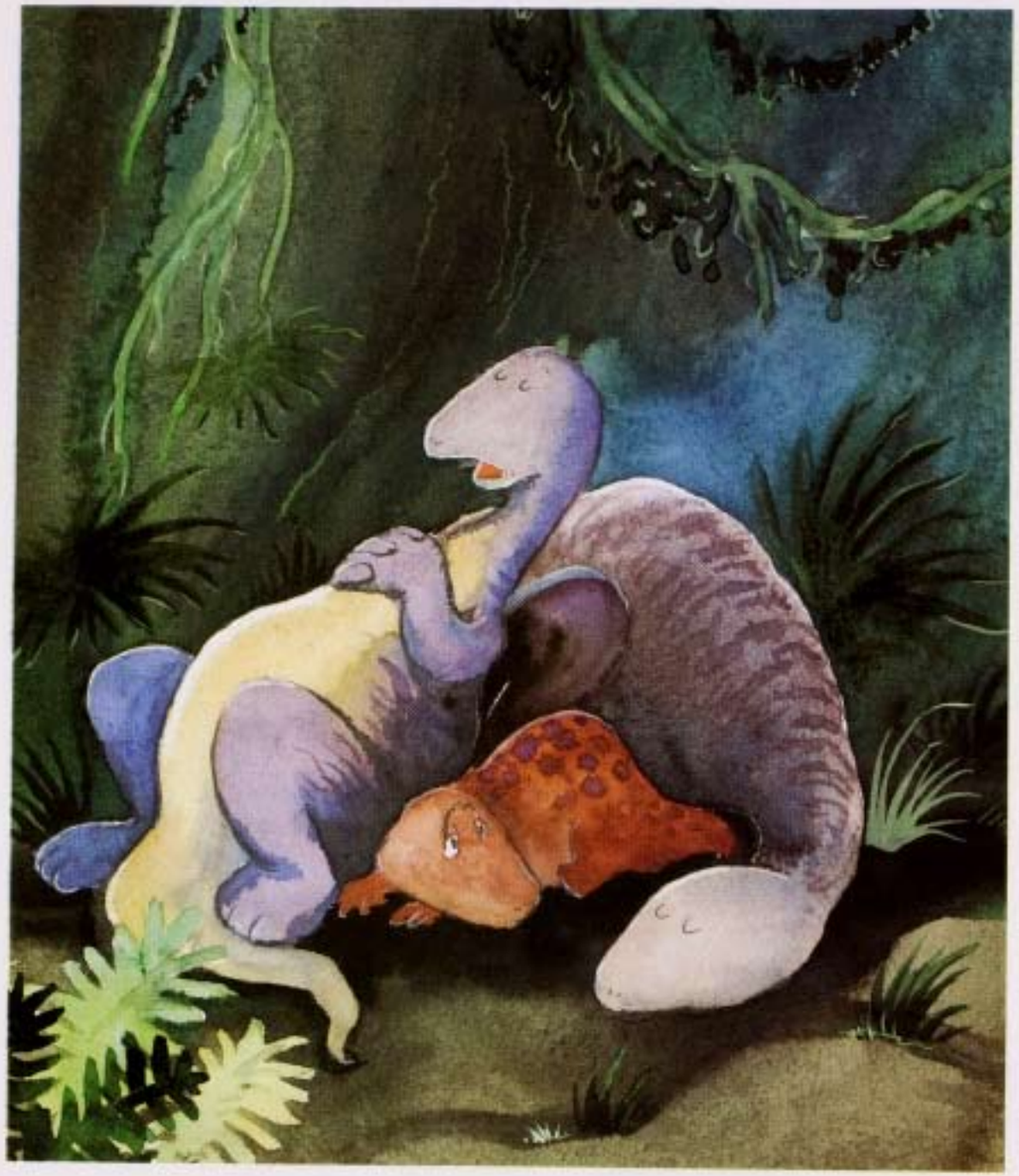
きょうりゅうの ともだちも
いっぱい いて……

まいにち いっしょに あそんだよ。
みんな だいの なかよしばっかりだ。
……そう、1ぴきだけを のぞいてね。

その 1ぴきっていうのが こいつ、タイローン。
あばれんぼタイローンって よばれてたよ。
まだ こどもの きょうりゅうなのに、
みんなの なんばいも つよくて おおきいんだ。
こいつときたら、ほんとに いじめっこでね、
きっと せかいで さいしょの いじめっこだよ。

タイローンは とりわけ ボーランドを
いじめるのが すきだった。
ぽかんと なぐったり、ころばせたり、
おやつを とりあげたりするんだよ。

ボーランドのほうは ちかよらないように
してるのに、なぜだか タイローンは いつも
ボーランドの いくところ いくところに あらわれる。



まいばん ボーランドは ねむれないくらい なやんでね、
どうしたら タイローンに いじめられないか かんがえた。
どうかんがえても おてあげだ。

テリーくんも いっしょに かんがえてくれた。
「タイローンと なかよしに なったら どうかな？」
テリーくんは いった。
「いうのは かんたんだけどね……。」と、ボーランド。
「まいにち いじわるされて ひどいめに あわされて
るのに、どうやって なかよくできると おもう？」
「じゃあ、なにか プレゼントを あげて、きみが
いいやつだって わかってもらうのは どう？」
ボーランドは また かんがえこんだ。 いったい
どんな プレゼントが いいんだろう……。
そうだ！ タイローンは いつも ぼくの おかしや
サンドイッチを よこどりするじゃないか。
「タイローンに プレゼントね……うん、やってみよう。」

そのひの ごご、ボーランドは タイローンを
みつけると、せいいっぱい あいそよく よびかけた。
「きょうは とっても あついね。おいしい
アイスクリームを いっしょに たべない？」
タイローンは ボーランドを じろっと みて、
それから ニヤニヤわらいを うかべたよ。
「へえ～、おれさまに アイスクリームを
くれるって？ そりゃ しんせつな こった！」

タイローンは アイスクリームを つかむと、さかさにして
ボーランドの あたまに ぐしゃっと おしつけた。
「わはははは！」タイローンが おおわらいして いってしまった
あとも、わらいごえは、ながいこと こだまに なって
もりじゅうに ひびいていた。

つぎのひ、ボーランドは ステラちゃんに
きのうの できごとを はなしてきかせた。
「あんまり おもいつめないほうが いいわ。
あいつが なにをしても ほうっておくのよ。
しらんふりしてれば、どうってことないわ。」
ステラちゃんが げんきづけた。
「だって こっちは びくびくしてるのにさ、
しらんふりなんて むりだよ。」と ボーランド。
「でも、いちおう やってみるよ。」

つぎに タイローンに あったとき、ボーランドは
へいきな かおで そばを とおりすぎようとした。
「やい、とかげやろう。おれさまの サンドイッチを
こっちへ よこしな。」タイローンが いった。
ボーランドは はしってにげたいくらいだったのに、
がまんして へいきな ふりをして あるきつづけた。

「じぶんで とりに いったほうが よさそうだな。」
タイローンは いって、ボーランドが サンドイッチから てを はなすまで しっぽを ふんずけた。
いたくて なきそうだったけど、ボーランドは ぐっと なみだを こらえたよ。

なかまたちは、タイローンに とっても はらを たてた。
「やっつけかえさなきゃ、だめだ！」と ステゴくんは いった。「もう がまんしていちゃ だめだよ。あいつに たちむかって、きみだって りっぱな きょうりゅうだって ことを おもいしらせてやらなくちゃ。へいきさ、あいつは ただ、くちが でっかいだけなんだから。」
ボーランドだって おこっていた。
「そうだよ！ もう にどと ぼくを からかったり できないように おもいしらせてやるよ。」
「その ちょうし！ すぐ やっつけに いこう。」

4ひきは タイローンを さがしに でかけていった。

ボーランドは あばれんぼタイローンに しっかと
たちむかった。「このやろう、よく きけよ。」
ボーランドは いった。「もう おまえの いやがらせには
うんざりだ。さあ こい、やっつけてやる！」
タイローンは ボーランドを ちらりと みて、ニヤッと
わらった。「いいとも、どうしても やりたいんならな。」

たたかいは あっと いうまに おわった。
チビの ボーランドは、ぜんぜん タイローンに
はが たたなかったのだ。「ごめんね、けんかなんか
すすめて。」と ステゴくん。「あきらめたほうが いいね。
ぜったい やっつけられない やつっていうのが いるんだ。
あいつを がまんするしか、ほうほうは ないのかもね。」

でも、ボーランドは そんなことは いやだった。
「どうにかして あいつを ぎゃふんと いわせたいな。」
つきが のぼり、おほしさまが そらいっぱいに
ひろがっても、ボーランドは かんがえつづけた。
やがて、すてきな おもいつきが うかんで、
ボーランドは にっこりした。
「そうだ！ それで いこう！」そして やっと、
まるくなって ねむりに ついた。

つぎの あさ、ボーランドは いつものように
サンドイッチを かたてに さんぽに でかけた。
すぐに タイローンが やってきた。
「おれさまの サンドイッチを よこせよ。」
タイローンは、ボーランドから サンドイッチを
ひったくると、たったの ひとくちで ごっくり
のみこんでしまった。
ボーランドは いそいで あるきつづけた。
とつぜん、ものすごい おおごえが きこえた。

「ぎゃあああああ〜っ！」タイローンの こえだ。
タイローンは ごうごう ひを ふいていたよ。
「たすけてくれ〜っ、しんじゃうよぉ〜っ！」
タイローンは さけんでいる。「だれか
きて〜っ、ころされるう〜！」

「ばっかみたい！」くすっと わらって
ポーランドは いった。「ただの サンドイッチ
じゃないか。きみが そんなに よわむしだとは
しらなかったよ。ぼくの だいこうぶつの
“めちゃくちゃ からい ひりひり サンド”
が おきに めさないとは ざんねんだね。」
わめきさけぶ タイローンを ほったらかして、
ポーランドは さっさと かえっていった。

それからというもの、タイローンは
なるたけ ボーランドから はなれている
ようになった。
ボーランドは まいにち なかまたちと
なかよく あそんで、よるは ぐっすり
ねむれるようになったんだ。

それから なんねんも なんねんも あとのこと、
かがくしゃたちが あばれんぼタイローンを はっけん！
ちょっとばかり すがたは かわっていたけどね、
あの ニヤニヤわらいは やっぱり もとのままだったよ。